

八尾市教育センター NEWS

令和5年2月

所報：382

相談支援係
072-941-3365

情報チーム
072-943-5785

研究研修係
072-943-5784

教育センター
Web page は
こちらから



ほっとはあと On Line (HHOL)



本センターでは、八尾市内の不登校の児童生徒を対象にオンライン学習支援の試行（ほっとはあと On Line）を行っています。原則、月・火・木・金の午前10時30分～午前11時45分に実施しています。時間は決まっていますが途中参加や途中退出もありです。機材は全児童生徒に配付している端末を使います。自習を基本としながらチャットで会話したりクイズをしたり、楽しく学べるよう心がけています。参加を希望する児童生徒には、本センター担当者が面談をして参加に向けた準備を行っていきます。

小中一貫教育担当者研修②



令和5年1月13日（金）午後3時～午後5時に小中一貫教育担当者研修②を本センターで行いました。講師は小柳和喜雄教授（関西大学）です。小柳教授には令和元年から本市小中一貫教育について継続してご指導をいただいております。今回の研修では児童生徒への小中一貫教育アンケートの分析の目的や手法さらには今後の取組立案への対策の立て方についてご講義いただきました。講義のあと各中学校区の担当者が一緒に自分たちの学校の中学校区のアンケート結果を分析し、特徴や傾向をホワイトボードにまとめ、全体で交流しました。



<受講者感想>

- アンケート結果を数値的に分析し中学校区で話し合うというやり方は、次年度の取り組みをどのように行うかということについて説得力のあるエビデンスを得ることに役立った。
- 小中一貫教育の効果が児童にどのように伝わっているのか客観的に見ることができた。今まで行ってきた取り組みも、分析をもとに、より効果が出るように計画しなくてはならないと思った。
- 全体的に肯定的な回答が目立った。特に特色として表れていると感じたのは自己肯定感の高さが見受けられたところである。今後も良い点は継続して取り組んでいきたい。
- 同じ中学校区においても小学校間での違いがあったので、自校のみの特色の分析もあわせて今日の分析結果からくる取り組みをアレンジしたい。

10年経験者研修④

令和5年1月17日（火）午後3時～午後5時に10年経験者研修④を本センターで行いました。研修は本センター鈴木雅博指導主事をファシリテーターとして、各自が作成した実践レポートの交流・検討会を行い、その後全体で交流会を行いました。最後に「組織を活性化させるにはどのようにすればよいか」をテーマに意見交流を行いました。研修の終わりに本センター打抜真由美所長より本年度の10年経験者研修最終回（閉講）の挨拶を行いました。



<受講者感想>

- 初任から10年経ったとはいえ、まだまだ分からないことだらけで、日々悩みながら業務を行っている。ただ、中堅の教師としては、学校全体を俯瞰し、アンテナを高くして学校全体としての課題にも向き合っていきたい。
- 良好な人間関係を前提に、質の高いコミュニケーションで情報共有をしていきたい。ICTの活用も適宜効果的に行っていきたいが、児童生徒の個人情報には配慮を要する。
- 人それぞれ得手不得手はあるが、相互に補い合えるような学校になれば素晴らしいと思う。また、様々な教育課題に率先して立ち向かうため自分自身の力をつけていきたい。
- 打抜所長の話にもあったように、「つなぐ」存在になることが必要だと思う。学校全体を一つのチームとしてつなぎ、それをけん引できるようになっていきたい。

2年次研修（初任者研修②⑤）



令和5年1月19日（木）午後3時～午後5時に2年次研修を本センターで行いました。この研修は令和3年度の初任者研修の第25回目に位置付けられるものです。研修は本センター川村泰司指導主事をファシリテーターとして、各自が作成した「評価と分析」に関するレポートをグループごとに交流しホワイトボードにまとめ全体で交流しました。後半も各自作成した「実践事例」についてグループごとに検討した内容をホワイトボードにまとめて全体での交流を行いました。



<受講者感想>

- 2年次で、市内で勤務している同じ教科の先生との交流ができ、いろいろな気づきがあった。また、講義の内容の中から授業づくりのために大切なことを学びなおすことができた。
- 2年目になって少しだけ自分の授業を振り返る時間ができたと感じる。それでもまだまだ課題はたくさんあるので、これを3年目、4年目と克服して変わっていきたい。
- 他の学校の先生と協議できる機会は貴重だと感じた。同じ授業であっても違うアプローチをしていたり、力を入れる場所が違っていたり、驚かされると同時に勉強になった。そして自分が大切にしていることを他の方も大切にしていることができて、励みになった。今後も自分の芯がぶれないように、新たなことを取り入れながら精進していきたい。

通級指導教室第1回事例報告会



令和5年1月20日（金）午後3時～午後5時に通級指導教室第1回事例報告会を行いました。最初に八尾市立志紀小学校の佐藤賢太教諭より事例の報告があり、その後今村佐智子先生（一般社団法人発達支援ルームまなび、理事）より講義がありました。テーマは「特別支援教育 通級指導教室による指導の基本ーアセスメント・クラスとの連携ー」です

<受講者感想>

- 通級指導をしていく中で、子どもが自分の課題に気づき、こうなりたいと思うようになることがとても大事なことだと思った。
- 担当している通級の児童たちの自信と意欲は引き出せているのか、日々実践していることを振り返った。
- 環境整備、生徒理解の共有、ユニバーサル視点の授業、合理的配慮、自己理解の促進が重要だと思った。



第4回幼・保・こ・小合同研修会



令和5年1月20日（金）午後3時30分～午後5時に第4回幼・保・こ・小合同研修会を八尾市文化会館（プリズムホール）で行いました。講師は吉岡眞知子さん（東大阪大学学長）で研修テーマは「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿を見通した接続のあり方～実践交流をふまえて～」

<幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿>

- ①健康な心と体
- ②自立心
- ③協同性
- ④道徳性・規範意識の芽生え
- ⑤社会生活との関わり
- ⑥思考力の芽生え
- ⑦自然との関わり・生命尊重
- ⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
- ⑨言葉による伝え合い
- ⑩豊かな感性と表現

第3回幼・保・こ・小合同研修会にてグループで作成したスタートカリキュラムの講評を交えながらの講義でした。また、グループワークでは顔見知りになったメンバーと和やかに意見交流をしながら、連携を深める様子が見られました。

<受講者感想>

- 校種を超えて話し合うことで、普段から大切に思っていることが大切であるということを再確認した。（保育園）
- 一人ひとりの個性を認め、それぞれに合った援助をすることの重要性を再認識した。（幼稚園）
- 「子どもに寄り添う」気持ちや姿勢は校種に関係ないということ、基本的な子どもへのかかわりは同じだということを再確認した。（こども園）
- 子ども第一に考え、あらゆる機会を使ってコミュニケーションをとり、子どもの本質に迫れるような教師をめざしていきたい。（小学校）



第4回5年経験者研修

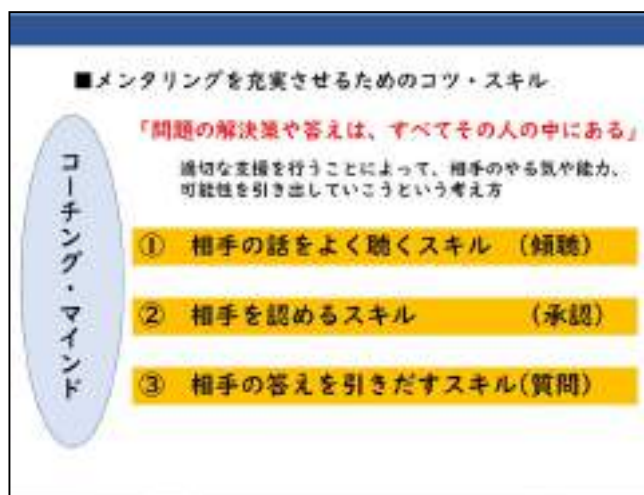
令和5年1月24日（火）午後3時30分～午後5時に5年経験者研修をオンライン（リアルタイム）で行いました。研修のファシリテーターは本センター鈴木雅博指導主事でテーマは「組織づくりメンタリング（検証）」です。5年経験者はメンター（5年経験者）とメンティー（初任者）という関係を所属校でもち、メンターとしてメンティーの成長を支えながら相談や

悩みを傾聴することで中堅職員として経験年数の少ない教員のよき先輩となる為の意識や力量を高めました。OJT を活性化することにより、5年経験者研修の受講者自身の資質向上がはかれました。

※OJT: 実際の職場で先輩が指導役となり、後輩に対して必要な知識や技術を教育する人材育成方法のこと。OJT は On the Job Training (オンザジョブトレーニング) の略称。

<受講者感想>

- ・メンティの悩みを聞いたり、問題を一緒に考えたりすることで、自分自身も課題について考えることができた。的確なアドバイスをするために、自分の考えをしっかり持ち、より一層知識も深めていかなければならないと感じた。(小学校)
- ・初任時代の不安な気持ちに共感できる点も多く、メンティの先生と一緒に悩み、考えながら実践できたことは、お互いの成長につながったのではないかと思う。後輩を育てていく立場であると、改めて自覚することもできた。自分に何ができるのかをしっかりと考え、この研修で終わりとするのではなく、今後も関わり続けていきたいと思います。(小学校)
- ・意見交流することで、どのような形でメンティにアプローチしていくべきかということも共有できた。新任教員の立場に立つこと、言い過ぎるのではなく、考えを引き出すこと、一緒になって考えること、など参考になることが多々あった。自分流にアレンジして今後につなげていきたい。(中学校)
- ・来年度以降も若手の教員が、能動的に仕事ができるように、コミュニケーションをしっかりとって、助け合える環境をつくる。また、私が先輩教員に教えてもらった知識や技術を少しでも伝えていきたい。(中学校)



研究協力員成果報告会

令和5年1月25日(水)午後3時30分～午後5時に研究協力員成果報告会をオンライン(リアルタイム)で行いました。各部会からの報告の途中で、使用したweb会議システムに全国的な障害が発生し、報告会を中断せざるを得なくなりました。については、各部会の報告内容(動画)及び「研究紀要」(研究報告冊子)は八尾市立小中学校の教員がオンデマンドで閲覧できるようにする予定です。

初任者研修⑱【授業づくり9】



令和5年1月26日(木)午後3時～午後5時に初任者研修⑱【授業づくり9】を本センターで行いました。研修講師は本センター川村泰司指導主事です。初任者は11月に行われた初任者代表による授業研究会の振り返りを行い、「よい授業とは何か」を交流しながら考えました。また、各自が作成した指導案をもとに授業実践を交流し、共通の課題、共通の悩みなどを考えました。

<受講者感想>

- 先輩の授業を観て、いいところは真似ていきたいが、そのまま真似るのではなく。自分らしさを生かした工夫もしていきたい。
- 初任者の授業を観て、目標となる大きな柱を一本立てて取り組んでいるとのことだった。同じ考え、違う考えそれぞれの意見を知ることができた。
- 子どもたちが主体的に学んでいるときが一番いきいきとしていると思う。だから活動時間を多くもって学びにつながるような授業をしたいと思う。
- 生徒にとって「なぜ」という疑問と気づきがある授業。「わかったことを次以降に用いることができる力」がつくまとめ・ふりかえりがしっかり行われる授業をしていきたい。そのためにはICTを存分に活用していきたい。



ICT 担当者研修②

研修のねらい

- 令和4年度の八尾市の取り組み、自校の取り組みを振り返ることや、各校の授業でのICT活用について交流することを通し、今後の各校のICT活用をより一層推進させる。



令和5年1月23日(月)午後3時30分～午後5時にICT担当者研修②(中学校)、令和5年1月30日(月)午後3時30分～午後5時にICT担当者研修②(小学校)をオンライン(リアルタイム)で行いました。講師は本センター山野元気指導主事でした。各学校の取り組み状況を交流すると共に、全国学力・学習状況調査より全国・大阪府との比較をしながら本市のICT活用状況を分析しました。さらにICT支援員の効果的活用法も共有しました。

<受講者感想>

- 他校の取り組みを聞いて自校がもう少し力を入れてやらないといけないことも見えてきたので、また来年度がんばって取りみたいと思う。
(小学校)
- ほかのグループの話し合いの内容も後ほど見れるようにしていただいているので、ほかのグループの内容も確認して今後のICT支援に活用していきたいと思う。このようなことができるのは、ICTを使った会議の魅力だなと感じました。
(小学校)
- タブレットは便利なツールであると同時に、便利すぎて本来の用途以上のこともできてしまうので、ルール作りをよく考える必要があると感じた。時代や生徒に即した課題設定が必要だと改めて感じることもできた。
(中学校)
- 他校と交流することで自分の所属する学校でも活用できそうな実践を知ることができた。ただ、出来るからやるというのではなく、教育の目的・本質に照らして有効だと思われることを実践していきたい。
(中学校)

授業の様子



教育センター「情報公開コーナー」

教育センターB棟（東側）の2階に「情報公開コーナー」があります。各種教育関係図書・雑誌等を配架しています。もちろん「教科書センター」として八尾市で採択している教科書や他社の教科書もあります。研修等で来所された時に直接ご覧いただければ幸いです。教科書・その他書籍・雑誌等も2週間の貸し出しを行っております。今回は1月から2月に配架した雑誌の誌名と目次の一部を紹介いたします。

「指導と評価」（日本教育評価研究会）2月号

- ・特集1 個別最適な学びと学習評価
- ・特集2 インクルーシブ教育における構成的グループエンカウンター

「道徳教育」（明治図書）2月号

- ・特集 リポートしたくなる授業アイデア帳
教室環境、教材提示、発問、板書、書く活動、終末、ICT、家庭との連携・・・

「月刊学校教育相談」（ほんの森出版）2月号

- ・特集1 ピアプレッシャー（同調圧力）について考える
- ・特集2 信頼関係が築けなかった事例から学ぶ

<雑誌記事を読んで>

「月間学校教育相談」2023年2月号（ほんの森出版）の14ページに宮内英里子さん（宮崎県公立学校スクールカウンセラー・都城市教育委員会特別支援教育相談員）の「ピア・プレッシャーをいろいろな角度から考える」という文書が掲載されています。「ピア・プレッシャー（同調圧力）」という言葉は、マイナスのイメージで語られることが多いように思います。私はそのことに違和感をもってきました。学校では「ピア・プレッシャー（同調圧力）」を使ってきたような気がしているからです。言葉に出す場合もあればそうでない場合もありますが「みんなと同じようにしましょう！」というのは学校教育では日常的に求めてきたことです。児童生徒の側から見れば「みんなと同じようにしていればいい」と感じているのかもしれませんが、これが強すぎると「強制」になってしまいます。また、マイナスの同調圧力が働くと授業崩壊と呼ばれる状況につながることもさえます。宮内さんは、プラスとマイナスの同調圧力や、プラスだけでもマイナスになってしまう場合など、ご自身が発行された『相談室だより』も使いながらわかりやすく解説されています。教育の場面では良くも悪くも、自分は「同調圧力」を使っているということのをわきまえながら、それがマイナスに働かないように心がけなくてはなりません。また、自分自身にかかるマイナスの同調圧力に対しては勇気をもって抗いたいものです。（葎仲）

「特別支援教育研究」（全日本特別支援教育連盟編集、東洋館出版社）2月号

- ・第1特集 協働的な学びとは？ 特別支援教育の視点から「学び合い」を捉え直す
- ・第2特集 夢や志をもち、自ら未来を切り拓く子どもの育成
～「自立と社会参加」に向けた特別支援教育の充実を目指して

「初等教育資料」（文部科学省編集、（株）東洋館出版社発行）2月号

- ・特集Ⅰ グローバル化する社会に向けた学習活動の展開
- ・特集Ⅱ [体育]学習指導要領における指導のポイント
全ての子供が楽しく、意欲的に取り組むことができる体育科の学習指導

「中等教育資料」（文部科学省編集、学事出版）2月号

- ・特集 中学校における資質・能力の育成に向けた教育活動の充実③
＜技術・家庭，外国語，道徳，総合的な学習の時間，特別活動＞

教育科学「国語教育」（明治図書）2月号

- ・特集 漢字・音読指導全解剖

教育科学「社会科教育」（明治図書）2月号

- ・特集 論理的思考力・表現力を育てる学習活動アイデア

「新しい算数研究」（新算数教育研究会編集、東洋館出版社）2月号

- ・特集 算数の「個別最適な学び」「協働的な学び」と「保育」「中学校」との連携

